

優秀賞 高学年の部

ふとんにつまった宝物

奈良県

山添村立やまぞえ小学校 六年

南俊太郎

「こちら、二階の二人早くねなさい！」と階段の下からお母さんがさげんでいる。

ぼくとお父さんは、ふとんの中にもぐっておしゃべりを続ける。学校でさか上がりができるようになったこと、好きな食べ物のこと、車のこと、カマキリをつかまえたこと、秋になったら釣りに行く約束もしたね。

お父さんのがっしりしたうでをまくらにしながら、話しつかれたら、お父さんの心臓の「ドククン、ドククン。」という音を聞きながらうとうとした。

ぼくは、こんな毎日がずっと毎日、ぼくが大きくなるまでくり返されるんだと思っていた。

けど、お父さんは突然、会社でたおれた。お父さんが入院して一週間ほどたった日、お姉ちゃんと病院にかけつけると、もう動いていないお父さんがいた。

ぼくは信じきれなかった。家族全員がインフルエンザにかかっても一人だけうつらない、スーパーウルトラ元気なお父さんが、突然亡くなるなんて。

お父さんがいなくなつて、はじめてわかったんだ。あたり前でいつもの事だったお父さんとのふとんの中の時間は、二人だけの大切な宝物だったんだって。「ふとんには、お父さんのおいとぼく達の話し声がつまっている

から絶対に洗たくしないで。」つってお母さんにお願いをした。

時どきさみしくなった時には、お父さんのベッドにころがった。そうすると安心した。

あれから三年たつて、三年生だったぼくは六年生になった。ふとんは、ぼくとお姉ちゃんがかろがりすぎて、少しべったんこになった。そしてぼくは、一大決心をした。お父さんのふとんを洗たくしてもらうことにしたんだ。目をとじれば、いつでもお父さんのやさしい声がかんてくる。だからだいじょうぶだつて思ったんだ。

お父さん、宝物の時間をありがとう。ぼくは、お父さんとすごした9年間で、夜毎日ふとんの中で話しをした、あの時間が一番楽しかったよ。あの時お父さんに話した夢がかなう様にいっしょうけんめいがんばろうと思う。お父さんが生きたかった毎日だから、今日を大切にしないでちやつて思う。

お父さんのふとんは、ふとん屋さんで洗つてもらつて、新品みたいに真白でふわふわになって返ってきた。ぼくはドキドキした。お父さんのふとんは、ぼくがもらうことになったから。いつから使わせてもらおうか。わくわくする。

お父さんに、ぼくの「ありがとう。」が届きますように。